

TL上の嫌がらせ

ジョン・スミス

張り紙

電柱に子どもが書いたような張り紙が貼ってあった。「こねこをもらってください。ぜんぶでごひきいます。ほしかったらひろってください。↓」。矢印に従って足元を見ると透明な袋の中に動かない子猫が五匹。少し待つとゴミ処理業者がやってきて彼らを持って行ってしまった。

どこかの屋上で

空を見上げれば満点の星。東京のマンションの屋上でこんな星が見れる日が来るとは思わなかった。扉の向こうには無数の死者が蠢いている。ここまで来るのも時間の問題だろう。世界が死者で溢れても空だけは変わらないのだ。あ、流れ星。

スペースバッター

「臼井さん、ガルシアの調子はどうですか」「安打数は大リーグ最多、最近は不調が目立ちますが彼を信じるしかないですね...」「今、ガルシアが人類の存亡をかけてスペースバッターボックスに入ります！銀河の果てまで流星を押し返すようなホームランを！」

明日のお天気

「明日の天気です。関東全域で強い雨が予想されます。一部居住区で漏水、雨水による汚染の恐れがあります。お出かけの際は防護服とマスクをお忘れなく。また降雨による浸水没の警報はありません」

安すぎる家

「山手線沿線で新築、陽当たり良好な3LDKが2万円なんて怪しすぎると思ったんだ。まさか玄関のドアがトイレのドアにワープするなんて思わないじゃないか。トイレ開けたら外に出て、玄関開けたらトイレの中だよ。出入り？ベランダの非常梯子だよ。それとトイレは一階のコンビ二な」

降臨

「また天使の降臨を見たよ。今月で四回目だ。アスファルトに叩きつけられた血と羽毛と骨と肉片は何回見ても慣れない。おかげでまた昼飯が食べれなかった。教会も素直に墜落死っていやぁいいのに。あの世はどうなってるのかね？考えたくもないね」

「本日未明、国連調査団がムンバイ 電脳センターに突入、破損を免れたデータログを入手した。調査入国はデジタル国交断絶以来、8年ぶりとなる。『0 = 4 2』、『この世のすべての数理化』などのログが多数見られ、インドの全電脳沈黙と何らかの関連がある疑い」

殺人ユッケの時期

「『ここは本当にオススメできる焼肉屋さんです！お勧めはサガリ！！このサガリは歯ごたえが良く、柔らかく、食感が良く本当に美味しい！！』とある焼肉店に寄せられた食べログコメントより。後日、この焼肉店の店長は殺人、遺体損壊、食品衛生法違反で逮捕されている。」

私の日常

「私の日常を小説として書くことにした」「日記じゃないか」「私小説と云いたまえ。そして、そこに作家の妄想が入りこむ」「日記じゃないか」「妄想私小説と云いたまえ。そして妄想は現実を浸食し、虚実が曖昧になっていく」「日記ですらないじゃないか」「小説と呼びたまえ」

蛍光質

「山田さんは蛍光質の肌を隠したいんだ。暗がりにちょっと立つだけで肌がぼんやりと光るのがコンプレックスなんだよ。だから常に長袖で、遮光メイクが濃い。だけど、一緒にベッドで過ごすなら山田さんが世界中のどんな女の子よりも一番素敵だと思うんだ」

「セックスすると相手の癖が感染するんだって」「一回くらいで感染されてたまるかよ」「何が感染したら困る?」「同性が好きなところとか、かな」「もうなってんじゃん」と言い切る前に、あいつの唇を塞ぐ。

エヌ氏

エヌ氏は泣きながら目を覚ました。「頭の大きなロボットが口をきいてくれない」という夢を見たせいだ。エヌ氏は、ここしばらく嫌な夢ばかりみている。頭をふりふりカーテンを開ける。窓の向こうの街を恐竜が闊歩していた。また別の夢が始まったようだ。

ノックの音がした

ノックの音がした。この個室も「まだ」。人気のない公衆便所の全個室が使用中。10分は待っているのに誰も出てこない。私は諦めて半キ先のコンビニへ向かった。その公衆便所に「ノックを返す幽霊」がいると聞いたのは、コンビニで下着を買った時だった。



「ここまでお散歩してきた気分はどう？なあに？何も着てないのが恥ずかしいの？透明なゴミ虫が人様の視界に入ると思ってるの？」と虚空に向かって話す女性を見かけた。彼女の向かいの椅子は人型に少し窪んでいた。

バナナと痴女

「浅川さんの部屋の壁には穴がある。そこにバナナを挿し入れると、男性器の如く反りあがる。浅川さんは、バナナに卑猥なことばをかけながら皮を向いて食べるのが好きで、そのために開けたそうなの。でも、浅川さんはバナナが好きだけで男性には興味がない」

丑三つ時の女

「丑三つ時に目を覚ますと、だいたい裸の女の幽霊が眠っている。肌の感触、肉の匂い、見覚えのある寝顔。初めは怖かったが、今はこうして幽霊と添い寝るするのが日課となっている。代わりに、昔の母の写真が恐ろしくてならない」

自販機プレイ

「佐川さんは口に硬貨を挿し入れらるのが好きだ。ひんやりした感触、モノのように扱われている気分が堪らないらしい。ただ硬貨を挿れられ乳首を触られると臍からガシャポンが飛び出すと知ってから、何か釈然としない気分になるらしい」

お金と親友

「お金で『親友』を購入した青年がいたとする」「うん」「その青年が『親友』と、お金のやりとりのない本当の『親友』になることが出来るか打ち明けたとする」「うん」「その親友は、本当の親友になってくれるかな」「追加料金を払えば『うん』で言ってくれるんじゃないかな」

会話

「さきほど観た映画の感想を聞かせてください」「一人称視点は面白い試みだね。レンチで頭を砕く瞬間が実に良かった」「主人公に共感できましたか」「いまいち解らないね」「右手に何をお持ちですか」「これはレンチだよ。ところで君はずいぶん僕そっくりだね」「ええ、鏡ですから」

創作論

「見えない何かが書かれた白紙があります。あなたには白紙を折り書き描きする自由があります。ただし時間が経つと、白紙には「真理」が浮かびます。当然、好き勝手弄ると読めません。けど、あなたにはまだ紙を折り書き描き、迷子を続ける自由があります。創るってこういうことです」

シチューがことごと煮えています

「♪シチューがことごと煮えています。私の足はありません。煮込み続けて三時間。私の手もありません♪」「その歌、やめてくれない」「事実でしょ？」「食欲なくす」「あ！『手はありません』は嘘になったよ」ほら、と言った彼女の肩の切断面から新しい指先がにゅっと生えていました。

ウサギの痴女

「夜明け前、ウサギの着ぐるみのみを身に纏った佐々木さんと遭った。こうして街を歩きたくなる夜があるのだそうだ。残念な痴女ですね、と言うと、そうね、と笑った。ウサギ頭をとった彼女からは、甘い汗の匂いがした」